

年の瀬の、寧日もない頃おい、土師姓のタユイ神からの招待状が舞い込んだ。そういえば、昨晚、開門開扉の一番太鼓が鳴ったはずだ。

肉をこそぎて骨となり果つるということを考えながら地下鉄の出口に立つと、良の方角にピアホールが見えた。もう何年も前のことだが、白い絹のドレスでめかした女とこのあたりに来たことがある。菖蒲の匂う頃だったか、海上バスの甲板で浮かれていると、舳先の方でしぶきが烟り、川の水が滴になって女の顔の化粧を崩した。舟を降りて橋を仰いだとき、赤ん坊を背負った女が欄干から身を躍らせようとしているように感じられた。ピアホールの長四角い大きな火桶で、微臭い味のするソースを何度も塗り重ねながら竹串の肉を焙っていたが、最初に呑んだ黒ビールの一杯だけが心に残った。

伝法院の通りを寄り道しながら右に曲がると、すでに深く酔っていたようだ。途中に大劇場の跡があったが、雨もよいの中をたちのぼる妖しげな気配にうちのめされて先を急いだ。

「さあ掻き込め掻き込め、縁起のいいのをまかったまかった」露地の両側高く、人々の頭上に鬱蒼と蔽いかぶさるばかりに、台付とか檜扇とかの豪華な竹把が数えきれぬほど重なっていた。小糠雨を切り裂くような威勢の

いい売り声が沸き立ち、赤色、金色、緑色の飾りが闇空を背景に燦いている。お福仮面が斜めに傾いていた。五、六万くらいのものでろうと思つて、「冗談じゃない、桁違い桁違い」と売手が怒鳴った。酔っていたので、思いがそのまま言葉になったのだろうか。鬼熊という安価なものを求めて、目の前の簪を内緒で懐に納めた。「はるをまつ事のはしめや西の市」(其角)と口ずさみ、ここいらでは「西の祭」というのだと思ひ直した。

今年には三の酉があるというが、大火事でも起こるのだろうか。ふらふらと吉原の方に足を向けかけたが、骨組みを晒けだした劇場のことが気にかかり、地下鉄の駅へ戻ることにした。

土に還るといふ汎神論的風土なのだと考えながら、浅草寺の境内でしやがみ込み、パイプを喫いつけたが、神経にかすかに刺し込む悪意が触れた。護摩の烟にあたればそれも薄らぐという声が聴こえたように思ったが、まだ闇も明けきらぬ寒い夜。じきに新年を迎え、暦は巡るが、時は革むるべくもなく、永遠に眠りつつけているのは精神だろうか、肉体だろうか。

ところで、三社祭にブラジルからダンサーを招き寄せたのは、ふっ、誰の悪だくみ。

縁起

緑字生ズ

題字 加藤郁乎

詩篇

《極地の子ら》から五篇	2	入沢康夫
大学通りにて	6	岡田隆彦
肖像	8	小岡明裕
草に棲む一族	12	岩井 薫
一人の空	14	福原哲郎
鷹雄	18	富永隆一
不安な旅行	20	油田敦彦
空中の書	27	紙田 彰
緑字生ズ	41	

デリュージョン・ストリート

紙田 彰
cover essay

窗櫺譜 23 神谷俊美

緑字生ズ 識語 52

美術協力 直江屋主人
富永隆一



《極地の子ら》から五篇（旧詩帳のまま）

入沢康夫

イドル 焦慮

銅貨はいつも表しか出ず
イドルは出発できない
夜々の砂の嵐に
イドルよ
銅貨を
投げうて 投げうて！

なぐさめるでせう
ぼく
いくらかは
できるでせう
聞くこと
泣き声
絶え入るやうな
長い
きつと
投げつけてやります
この銅貨
ぼく
押寄せたとき
砂の嵐
時鐘の綱
ないのです
裏
銅貨



巨大な混雑の池 (四角の池)
三軒の尖塔と街面の目く刺せ

アエマ 夫類

サウに面して へしるるるるるる

ああ

できません

行くこと

命じてます

生存

銅貨の表

毎日

ケルケル 哄笑

サントオル コップの中で笛を吹き
コップの中でサントオル 笛を吹き
すべての歩みを押しとどめて
夏をつむぎ出す

This is the place called Shibuya.

This is the place called Shibuya.

Ah, we are in Japan yet!

十時の品質の霧が音も立てずに襲ふ車窓に

淋しいケルケルとその一党

万歳 ケルケル

笑つてゐる! 君だけが

Centaur jouait de l'argent pipeau,

*Dans un petit verre à boire de l'eau.
Arrêtant toutes les marches soudain,
Il appelait l'été au ciel serein.*

サントオル コップの中で笛を吹き

ケルケル!

どうしたら死ねるだらう

Yp' ne ose se jeter he!
Yp' is the place called Zhipanor
This is the place called Zhipanor

ザク 涕涙

ザク かわかれて

石につまづけば

花々や

(天は青銅)

ザクに向ひて くづるるならずや

フェラ 失敗

三角形の尖頂と海面の目くばせ
巨大な弧線の赤 (切れた弓弦)

番日
職員の姿
主君
命じたまふ
行くこと
つきません
あゝ

横倒しになつて 一度二度ばたついて
水面にはりつく蝶

雲が切れて

群青の傷が

どつと

脱出失敗者フェラの上に口を開ける

鷗が喚く

シャク 昏倒

殺到する衰弱は

シャクを最前列に突き放つ

永遠の潔白が天の車軸にもたれて甲高く笑ふ

花の上に倒れまいと思ひながら花の上に倒れる

あらんかぎりの罪はシャクの魂の強靱さにかかつてゐるが

シャクは昏倒して 果しもない

付記

《極地の子ら》は以上のほか、「トデ・チ 失
踪」「ジャンカ 心中」「ドッテ 忘却」「ド
ン 奉公」「リリ 結婚」等、全十六篇で構
成されてゐた。

大学直りコア

「ライオンズは勝ったかな」

みんなキャンパスの緑も忘れて

きめられた向きに向かってそぞろ歩く。

ねぶたの旋回が規制されているように、

誰も真ん中に飛び込まぬ、これは祭りです。

祝祭にバナナとソバは要るのだろうか。

ダイジョウブデショウカ？

「さあ、また」

野暮な文の調子で、

「さあ、また」

「さあ、また」

「さあ、また」

「さあ、また」

「さあ、また」

この悲劇は土曜日の朝の新聞の裏面に載った。

1970年

自叙

小園理恵



肖像

小岡明裕

この悲劇が上演される時代の衣裳を採用のこと。

J・コクトオ

わたしは決して夢をみることはない。

幼年期の黄色い記憶の回廊を飾るモザイクのように、繰り返されることばの魚鱗の冷氣のなかで徐々に形のようなものをなしてくる女の顔をみる。

少女が前を歩いていて、耳なれぬことばの湧きだすところが急に懐しくなり、鳥の巣のような頭をした少女のあとを執拗につけてゆく。——夜がそのぶあついまぶたに幽閉していた少女。視線は少女の踝に貼りついたまま、下着のように乱れたひとすじの文脈の地層を辿ってゆく。

「なぜ、あたしをつけるの？」

おまえがもっと子供だったとき、白亜紀の砂を踏む登音はおまえの錦蛇の踝から宝石のように転ったものさ。

半ば昏のように開かれたままの扉の背後に横たわる光の三角形、むきだしの白ちやけた床の上に、ほぐれてたなびく曖昧なことばの群。

懐しきは、そのためかどうか、湿った空気のなかを空疎な羽虫の群のように横へ横へと流れていってしまう。



わたしのなかには眠りつづける小さな庭園がある。噴水のざわめきや黄色の芝生、それらを短いまなざしで射る蠍のような誘惑の偶然のなれあいのなかにとどまろうとするわたし。

目星をつけて尾行する少女の夢みる足をしめつけているサンダルの迷路は、花瓶の底にふきだす緑青の花のようなことばの王国を踏みはずす。

よろめいて右の手を突きだすと、息をのむピロイドの闇の仄白い光のなかには、女の、眼を閉じて心もち上向きかげんの横顔が浮かび、スワンネックの曲線に沿って目をみひらきながらわたしの手の方に向き直ってくる。まるで、前方に突きだしたままつかみどころもなくさまよっているわたしの手が、彼女の行くべき方角を指し示してでもいるかのように。

世界は時間を見失う。それと同時に、わたしは額に彼女の額の接触を感じる。まだ名残りの星のきらめいている空の明るさのような接触。

「なぜ、あたしを追い越して？」

時間は世界を見失う。

束の間、西日に染みそめたことばの群雲に鋭い亀裂が幾条も走り、扉の向こうの扇形の光の塊りは、磨りガラスを透してみるようにほんやりと単彩にかすみ、追風が吹いて、ことばの裾はみだらにはだけて少女の踝をくまなくおおう。

「なぜ、あたしの影によりそうの？」

そのまま、声帯を別られたことばは女の柘榴のまなざしに乱反射し、目尻からはガラスのかさぶたが次々と剥れ落ちていくが、その落ちていくはては、わたしにはみえない。その瞬間の光の裏にたしかに、いつでも、踏破されることのない各瞬間に向きあって何かを待っているときのふくらみを感じていること、あるいはわたし自身がそのつつましい薔薇色のつぼみの束の間の曲率によりそうこと、そのときには覗きみられる背後の距離はいっせいに霧消する。作り笑いの口許に立ちつくしているわたしの右手が炸裂し、昏倒しながら、白亜の登音に沈んでいく。

墓のなかにまみれた己が髑髏に見惚れんがため、骨の指もて墓穴をまさぐり、重層する地層のなかよりほじくりだしたわが頭蓋骨をいとおしげに関する純粹な悪意が、見えるもの見えざるものとして、わたしの螺旋状の昏倒の明るみのなかにその正体をむきだしているいま、彼女の顔は、いわば永遠の期待にすぎぬのであろうか。

「なぜ、なぜあたしを見つめるの？」

光のなかに交錯した待つ女の後姿をみるのは夜である。犯すことをしないで犯される罪に貼りついて、女の顔はいつまでも闇の皮膚のうえに浮き彫りされている。またたきながら、舞台もまたたきながら、舞台裏も必要ではないということだ。扉のうしろにひとつ髑髏を配置するだけで

事足りる。

かくして陰画は額縁ともども闇にかき消える。

純粹な影が女の顔によみがえってきて、——おお、遁れ去るべき夜の遺骸よ——その気高い鼻梁をひときわ美しいものにする。

伝説の牛がいまなお反芻している白紙のうえでは、踏みまよった古の少女の双踝がむつみあっているが、闇ではない夜の底に沈められ、永久に消え失せるために、待つときのふくらみで瞳をこらすと、女の顔はかすかに頬笑んでいる。

だが、夜の運命をかくぐって照り返されている落日、その淡いシルエットをかすかにふるわせ、長い睫毛の尖端の何か小さな球体に宿るこまやかな時のざわめきのことなど思いはしない。首飾りの真珠にひろがる七つの海は、いつになく女の顔を暗くしてわたしをひきつけている。

夜ではなく、闇によって分割された切れ切れの冷笑の彼方、時の横顔へ、いま、あわただしくかりたてられる永遠の一步。

Le 25 octobre, 1983.

草に棲む一族

岩井 薫

videmus si floruit vinea——Ct.6, 10

森と沼

胡桃色のウツボカズラの蔭できみのヴァニラが籠に盛ったパンを数えている森

無限記号を額に刻印された髪切虫 彷徨う救命器と歯の無い円筒に姦された少女

帽子型付器の舌 鎌鼬の森 倭文しやの苧環わたまきの影 オオコガネアゲハの固形の沼

楕円形の自転車で母の織る倭文はた帯を捨てに行く隠り沼 枯れ行く浅茅生あさぢうのコカ・コーラの壘

眼差しと声

一族の食卓を囲む黒い椅子で頷きあう髪の毛と睫毛と睦みあう硝子の眼差し

庭園で静かに発熱して光を帯びる時計 乳房にあてた絞首刑死者の切り取られた手

広場の空の鯖雲を映しジプシー女が髭を剃る剃刀 月の眼球切開術が滲み出る鍵穴

空気の迷路で失踪した黒犬の耳に囁く赤く翳った家畜商人の声 溺死者の手の中の藁

柄付眼鏡で読まれる古びた神聖ローマ帝国刑法典 泣きはらした縄と斧へ血の悲鳴
無窮に滴る眼差しは苦い核となった 真葛ヶ原の風に吹き散らされる核 葦の核

声は廃墟をめぐり旅の道連れは杖に一羽の木菟をとまらせた 聾の男 水飲み場ごとに沈黙があ
り……

一族の掟を刻んだ黒い石板を砕いて沼に沈めると幾千の破片が蛭になった 蘭とジャスミンの交歓
闇に溶解鏡の裏箔に塗り籠められた字母 追放された岸辺の将棋指しの王座 星座と暁の掟

大脳皮質からコルチ氏体まで彩色する人体模型師 鎌鼬に恋する少女が裸で睡む草叢

木の心臓を持つ一族の旅 眼鏡蛇の紋章の旗が翻る暁方のトラック 山羊祭までに口を蜜にする

die 23 octobris, 1983.

一人の空

詩歌

一人の空

福原哲郎

昔の神々が鎮まる過去の空でその心を失い、新しい神々が生きる未来の空で無数の心を想い、ふたつの空を行き来して腰定まらぬ揺れる舟子よ。おまえはすべてを満たし終った至福であるのもなく、すべてを満たし得る至福であるのでもない。おまえは永遠に開き咲き流れ続けねばならぬ貧しい心の河であり、心の開花と顕象は、膨大な精神圏の遺産からも遠ざかり、無限定な可能世界からも遠ざかり、おまえがいまここにこうでしかないことの貧困からはじまる。すでに行われたことを含まず、いまだ現われぬことを含まぬ、ひとつの場所があり、見出すならば、はじめにおまえは、記憶と予感の一切のきずなから断たれ、父と母のふたつの故郷の中間に投げ出された者として、感情を失い、空白となり、蒼白な一人となるだろう。現在の空は、なにもものも存在しない虚空、かつて現われたことがない無際限の異貌のものが、これから現われる場所である。一人の虚空に到った恐れの中で、はじめて過去圏の連鎖の糸と未来圏の予感の糸とは互いに出逢う。おまえの死なんばかりの頼りない虚空の中で、記憶の総体からひとつの記憶が残され、予感の総体からひとつの予感が現われ、おまえはふたつのものをたわめておまえの意志をつくる。おまえがいつかそこで火を燃やし、おまえがいつかそこに真直ぐに立つならば、おまえは心の王国をになう一柱の神の子をおまえのうちに養うだろう。

焚かれたことがない夢の倉があり、飲み干されたことがない花々の杯があり、輝いたことがない星々の眠りがある。おまえにひとつの言葉があり、百億のおまえに無辺際の歌があり、おのおのひとつの言葉を額にしるし、おのおの霊を受けよ。言葉は遠い彼岸世界への橋である。言葉よ、神の無言の静謐に到るためのせつなくはげしい言葉宇宙の営みよ。光への意志として目醒め、流

れゆくもの自らが覚える流転の震え。彼岸に光の船が発つならば、言葉はその光の燭台を務めることだろう。一人の空で、意志として生れた言葉が、自己の運命に従って自らを前方に投げ、自らの外側を歩きはじめ。おまえ自身は言葉の宇宙を抱えて静かな受霊の庭における鎮魂に踏みこみ、さらになにものかを呼び寄せるために橋を渡りはじめた。期待にふるえつつ、その期待が霊肉が一致和合する祝福された水面で結ばれることを漠然と願いつつ……。しかし、やがておまえは渡るほどに踏み迷ってゆくだろう、冷やかな拒絶の門に行き当り、そこにおまえが倒れてゆくだろう。神域への両刃の剣である人間の意志に含まれた傲慢に対する、遠い咎めの声が聞える……。おまえはその一人の空でなにごとを望んでいたのか。それは自己の全救済を諦めきれずに、聖霊を自己の肉体の根にまで降さんとしていた神域に対する侵犯の罪であろうか。意志は全救済を待むことしかできない。言葉は自分が神となる夢を捨てきれずにいるのだ。しかしまたこの咎めの声が聴えるところまで行かねば言葉は霊を受け得ず、傲慢の罪に触れねば拒絶の門をくぐれず、意志は意志することの煩いを解き放つことができない。行き暮れた時、すでに一切が没し去り、ただひとつ残された意志の、おまえの側から意志することの営みがそこに終ってゆく。おまえは霊肉の一致を保つ自らの自力を使い果したのだ。そこにおまえは、おまえ自らの鎮魂のあきらかな限界を、与えられた自力の隠れなき涯を見出すだろう……。意識の最後の部屋で霊化されるものが、肉ではなく、言葉であるとするならば、おまえの手が神域の中の永遠によく差しのばされることを得んがために、おまえの現身がまず一人の空で行き暮れ、現身が肉ある者の悲哀として意識されるであろう個体者としての制約をくぐらねばならぬのも自然であった。神の燈火は制約があきらかな制約として裸形にされるところで光を放ち、肉の悲哀をくぐらぬ想像の発露の、無限定なものだけが飛び交う夢野における幻想の類ではなく、制約の輪郭が澄むほどに燈火は明るみを増し、肉の冥さが増すほどに霊は自らの明るさを加え、われわれの魂の霊的な垂

線は、個体の輪郭の凝固を深めてゆく肉体の伽藍の中で立ち昇り、霊者としての歎びが肉体者としての悲哀の水面に浮び出る。諸々の限定者の内部に点されるその燈火を、地上の宝として手にし得ぬわれらの天上の宝と呼び、その燈火こそ大宇宙に精神の火をあかあかと点し続ける光源であり、父なる神の国の内実は、一切の限定者のうちに宿された天上の宝の総合であるだろう。肉は翼と化さず、翼と化し得ぬ肉の悲哀の、その自覚の中に、霊の翼は発つだろう。行き暮れて倒れたおまえの内部にこそ歎喜の渦が姿を現わし、そこに光の船が生れるだろう。肉の転身の願いを諦めて言葉の転身を果たし、岩戸開きを諦めて岩戸開きする渾身の岩戸開きよ。われわれはもはや肉の翼を望まず。おまえの全身がひかり輝くのではなく、肉はただひたすらに灰燼として倒れ、人間の個の宿命を体して縊れていけよ。

肉体を沈めて言葉を発たせ、おまえの顔を空と観じておまえを生きる現象界の澄明は、存在から存在が見つめられて地上に幽閉されていた病める顔の、顔が無からの遙かな気配として感じなおされて顔の無限が想われ、新生の領土に置きなおされた顔の甦り、顔は一個の無限を封じた泉、地上での他者との顔の比較ではなく顔の一人であり、顔の自愛ではなく顔の抽象であり、顔の滅ではなく顔の透である。霊を受けた言葉の魂は、すでに他者と他者とのあらゆる争乱、一切の毀誉褒貶に関与せず、個の独自性は衣裳と衣裳が優劣を競って相争う外界への主張をつくらず、外界と内界の境界を走る車輪である。つねにひとつの独特な殉教を強いられている言葉よ、地上の喧噪の世界を離れて行くべき方向を見出した言葉が、群がる肉体の市場を貫くことで清い庭に届く透明の力線と化してゆく……。地上の花々を見て見ぬおまえの盲目の中に天上の花を見つめているおまえの顔があらわれ、おまえの知らぬおまえの顔がおまえから旅立ってゆき、同じように遠ざかってゆく見知らぬ彼等の顔に出逢った。交感の悩ましい火花を散らす奥深い魂の目合いよ、

おまえの光の船はいま、おまえを越え、おまえの他者達を越え、隠されていた全体の未知なる王国を流離っているのだ。

——ひとときの鎮魂の後の、鎮魂に破れて陥らざるを得なかった惑乱、そして惑乱の後の、訪れるであろう新しい朝の静けさよ、その静けさの中での……、もはや一人であるのでもなく……、そこにおまえが存在することの洗礼、そこにおまえが在ることの表現、おまえがそうでしかないことの久遠の行き暮れに、一片の光を投げ入れて、おまえがそうであることの歓びへ。まさに一塊の自由、ひとつの燃える心、ただそれだけのことに、無限なるものの風よ吹け。

(空のふなうたのための五章・第三)

……

……

……

憲報

富永瀬一

鷹雄

富永隆一

その押入はどういう訳か、固く閉じられていて、鷹雄がどんなに強い力で開けようとしても、頑なな人間の口のように、一向に開く気配がなかった。永い年月を経て、手垢や落書きで薄汚れた唐紙は、その気になれば簡単に破れるであろう。しかし鷹雄としては、飽くまでも押入の機能としてのその引き戸を、自らの手で開きたかったのだ。そして、内部の構造を窺い、秘められた空間を暴いてみたかったのである。

街を彷徨い歩きながら、鷹雄はひたすらに押入の内部を思いつづけた。(もしかすると、こうして歩いているこの道は、あの押入の内部へと続いているのではないか。そうだとすると、この道の先のどこかに、押入への入口があるのかも知れない。しかし、この三叉路はどちらへ行けばよいのだろうか)

鷹雄の足は戸惑い乱れた。右へ折れることの不安、中央を進むことの焦躁、そして左へ曲がることの寂寥、それらが鷹雄の脳裡で明滅し、回転した。やがて思い迷った末に下された決断は、歩いて来た道に戻るといふ諦めだった。

すっかり日の暮れた夕方、鷹雄は意気消沈して部屋に戻り、ふと押入を見て自分の眼を疑った。そして、暫く体を固くしたまま、その場に釘づけになった。あれほど開かなかった押入の戸が十センチほど開いて、仄暗い内部をわずかに見せていたのだ。鷹雄は慄えながら、恐るおそる押入に近づいた。そして小さな瞳を凝らしたが、そこには暗い闇があるばかりで、何ひとつ形らしいものはなかった。その喩えような不気味さは、鷹雄をして、目眩く暗香へと誘うのであった。

鷹雄はもっとはっきりと内部を見たいと思った。そして、慄える体を努めて抑えようとしながら、戸に指をかけ、勇気を奮って、そろそろと開き、ひよいと頭を入れた時だった。何かが鷹雄

の頭を掴み、ぐいぐいと奥へ引きずりこんだのである。鷹雄はひんやりとした、まるで蒟蒻こんじやくを思わせるようなその感触に、たまらずにぞつと身を慄わせた。それは多くの触角を持ったひとつの肉塊のように思えたが、また押入の内部そのものが鷹雄を包んでいるようにも思えるのだった。たかだか畳一枚ほどの広さだと思っていたのだが、ずるずると引きずられるところをみると、どうやら相当に長い洞穴のように感じられた。俯せになつたまま、一体何処へ引きずられて行こうとしているのだろうか。鷹雄は不安に襲われながらも、何の抵抗も出来ないまま、ただ黙々と恐怖を甘受しているほかなかつたのである。

悪夢はどのくらい続いたのであろうか。一時間、それとも二時間、いや、夢の時間の感覚が曖昧なように、もはや押入の内部では意識が鈍磨しているのだった。そこでは、時は忘れられた記憶のように、何処かへ飛翔してしまつたのである。引きずられながら鷹雄は、自分の肉体から重量感が薄れていくことに、おぼろ気ながら気がついた。もしかするとこの感覚は、死の淵へと流れゆく、生との訣別の際に生じる、幽暗の世界を彷徨う感覚ではないかと思われてくるのだった。神社の樹々が風に揺れて、葉がざわざわと触れ合い、晩秋の夜は冷気を漂わせて心寒い。鷹雄を訪ねた友人は、彼の部屋に入つて首を傾げた。何度も鷹雄の名を呼ぶのだが、返事をしないのだ。もう一度と思い、口を開けようとした時だった。鷹雄の後ろ姿が、熱湯を浴びた角砂糖のよううにみるみる形を崩し、ただ大きな眼の玉だけが、畳の上で人懐かし気に、その友人を見つめていたのである。

鷹雄は目を覚まして、
友を呼ぶ

不安な油汗

曲田孝志

不安な旅行

油田敦彦

夜になると

凄じいばかりの嵐になり

空一面を 蒼い風が渡っている

サツフォオが稲刈りをしたのも、この時期の昼過ぎだったのだろうか。深い魂の水溜りを覗き込むと、杉苔などの地衣類に絡まって、アンドロメダの留金が捨てられている。タンポポの種子のように、フワリとしているかと思うと、実際は時計の短針のように、堅牢であって、農夫の鍬や鋤のように、ピカピカしている。ゆっくりと開かれる窓のために、風がめくれる。鍵型の蝶の影が、紅色に濡れる頃

泥土にくるまれて眠れ

暴風雨の睫毛が

小枝のように揺れる

古代地図にあったビルマのパゴダは

海藻のようにそよぎ

生駒の山系は幻の形態

地表には極光のような

稲穂の鼓動がザワと揺れ

「キリコの脳味噌は矢張り淋しい　イカルガ以上に淋しくてカボチャのように空疎だ」

心臓の水脈を曳きながら

こんな迷信を想い浮かべるのは

イカロスがさかしまに墮ちた

海辺の美しい光景を

昼間に考えていたからだろうか

「秋の気配は牧神の午後の如くにおだやか」で

卵白から抽出された

バタイユの眼球を想い出す

イカロスの眼球が

太陽の灼熱に灼かれたのであれば

バタイユは背徳という精液で

眼球を潰すのであろう

歩く。靴すのついで

斑鳩を歩く音響のついで

脳髓の内側を散歩するように

ウツソウとして

静かに歩く細粒の影へ出す

法起寺は 無出を以て

ただの夜明けの静けさのついで

少年の男根のように

テンとして佇んでいる

トウロスなまじり

こゝろを静かに歩かせる

心算の糸を更紗の

「それらの細粒の影へ出す」

静寂の音響を

無言のうちに

主眼の山を

静寂のついで

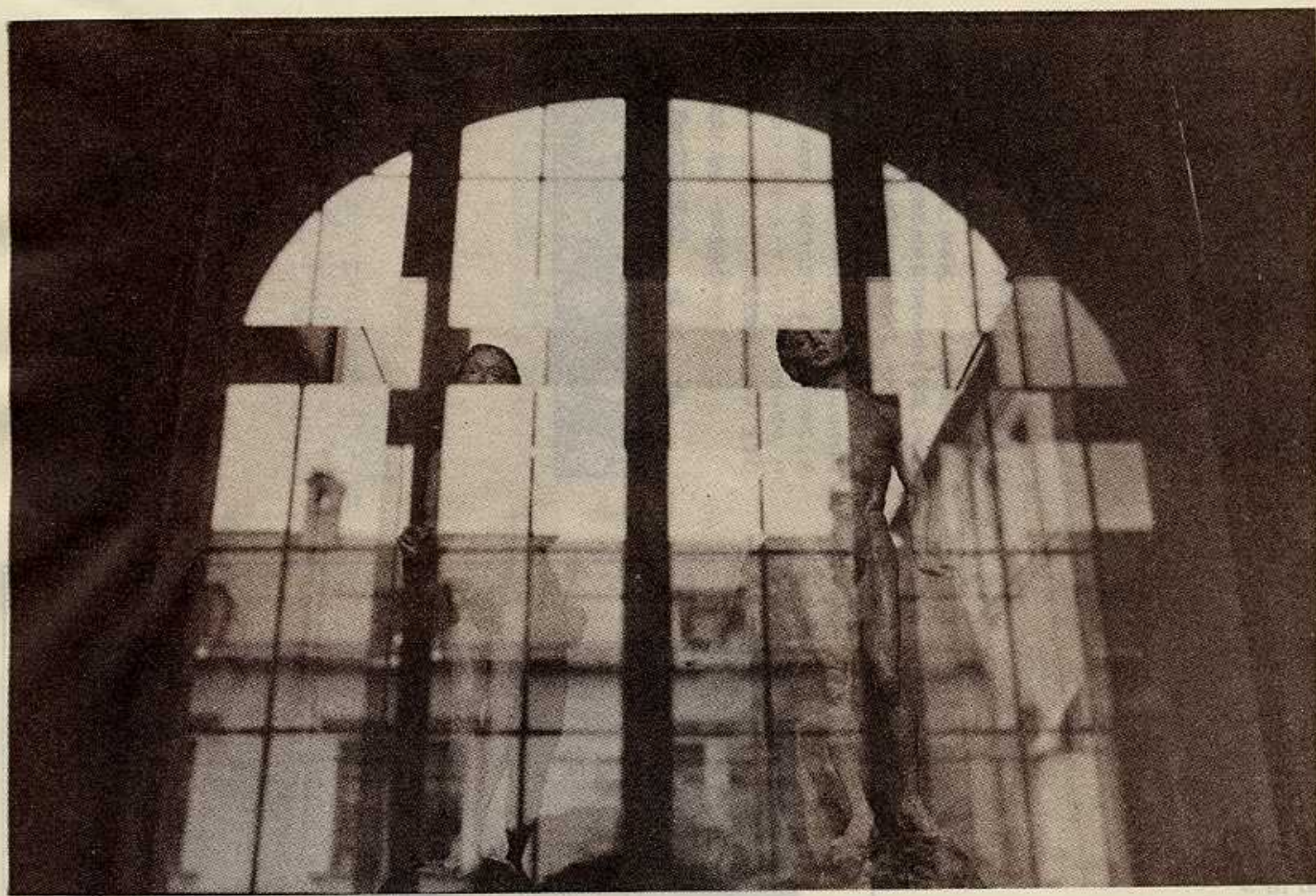
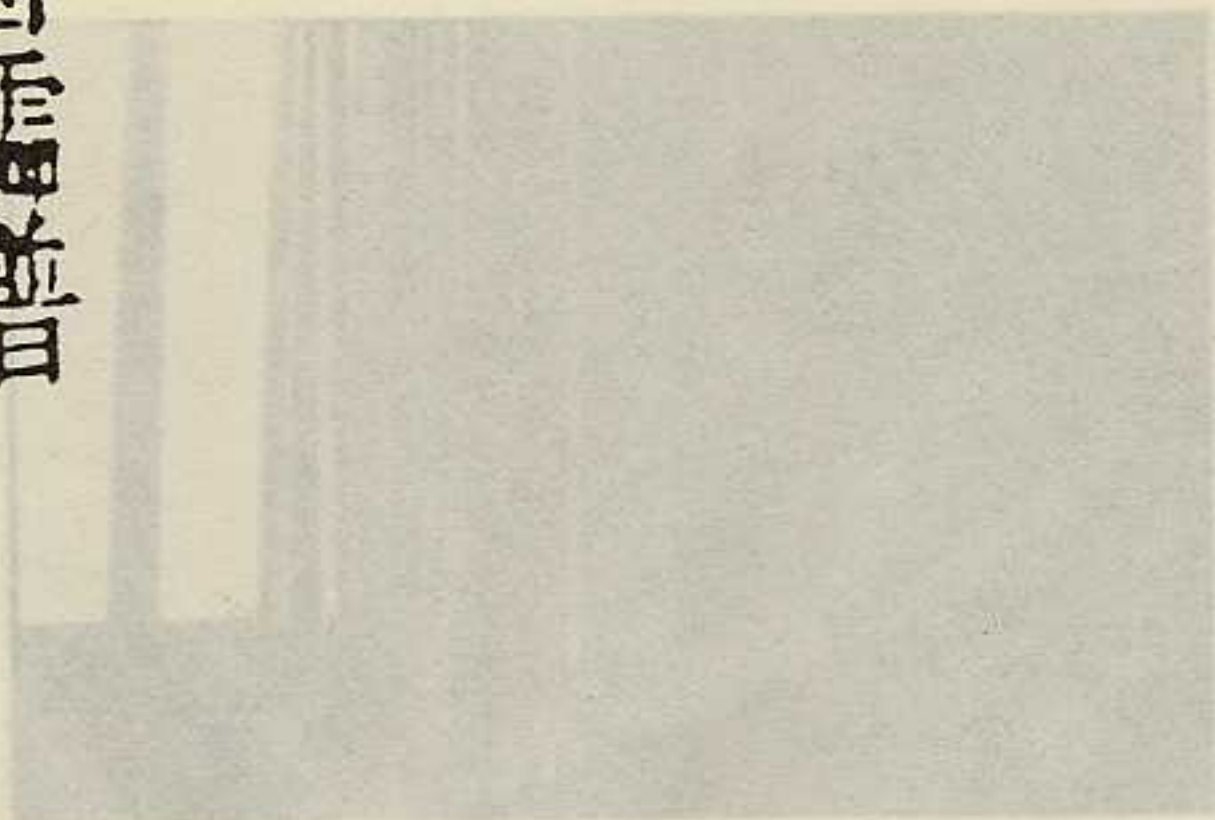
古方眼のついで

小粒のついで

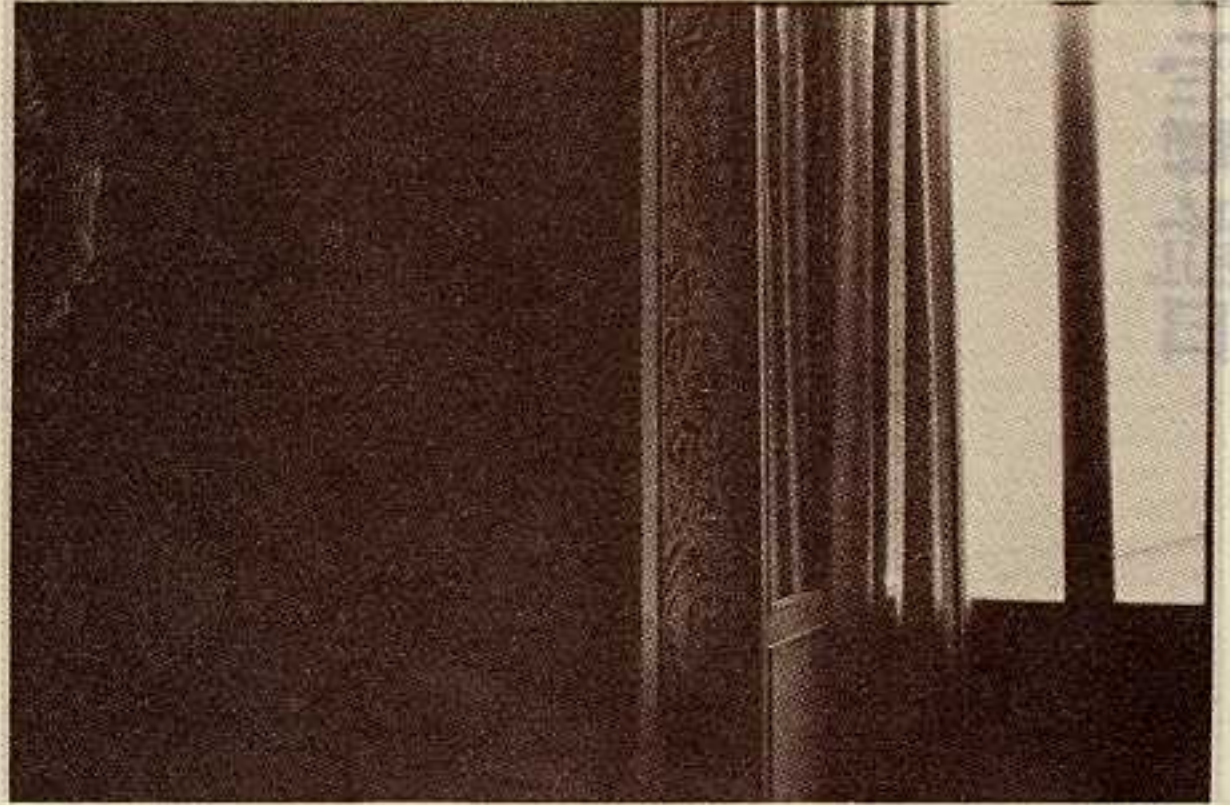
静寂のついで

静土に

窗櫺譜



110. 窓櫺譜
111. 窓櫺譜
112. 窓櫺譜



窗橋譜

神谷俊美



窗橋譜頌 紙田 彰

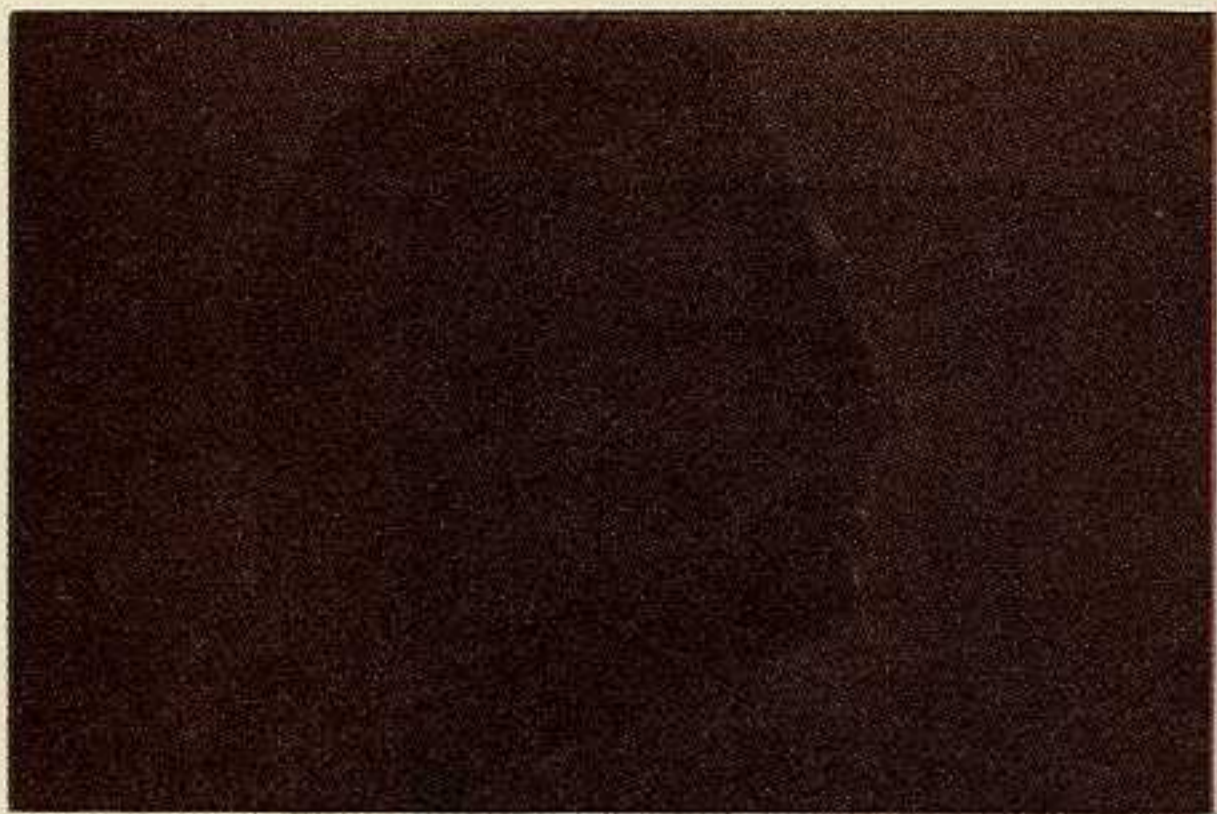
視線の造型—物質創造のドラマ

ダイヤモンドの内部に囚われた処女を描いたのは、周知の如く、アンドレ・ビエール・ド・マンディアルグである。この作品『Le Diamant』を読むたびに、時間と手数をたっぷりとかけた豪華な料理を食するような喜びに浸ることになるのだが、それにもまして、緻密に構成された同心円的構造という容器的完璧さに舌を捲かざるを得ない。女主人がサラがダイヤモンドという物質の至高性に至るまでの階段、つまり、螺旋階段、円形の踊り場、全庫室、フリズム型金庫、抽斗、皮袋、空色の包装紙、拡大鏡へと収斂されてゆく内部への旅が、聖堂をはじめとする聖遺物器やスウェーデンボルグの人体宇宙論などに匹敵する入れ子構造の具型とみることが出来るからである。その極限ともいへべき結晶体にサラが封せられようとする時、マンディアルグは「どちらが品物で、どちらが鑑定人あるいは保証人であるか」と眩惑の思いを述べている。「窗橋譜」について感じたのも、このことである。

ここには定かあまりにも多い。定に開わりのない作品は一葉とてないと断しても差支えあるまい。もっとも、カメラ自体にレンズとかファインダーという定が内蔵されている以上、驚くほどのことではないのかも知れない。人間の眼球からして硝子体や水晶体という光の定がある。視神経を脳髓の定、脳髓を精神の定と考えることもできる。このように肉



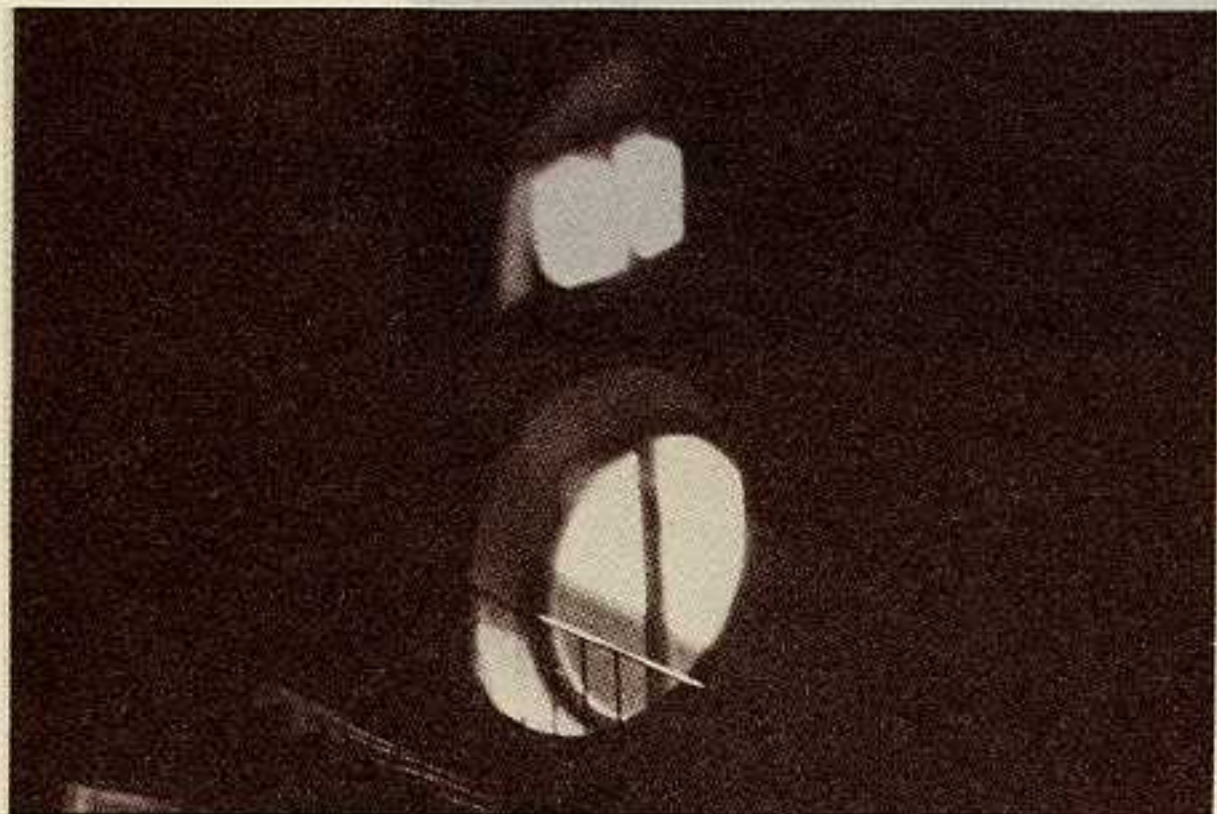
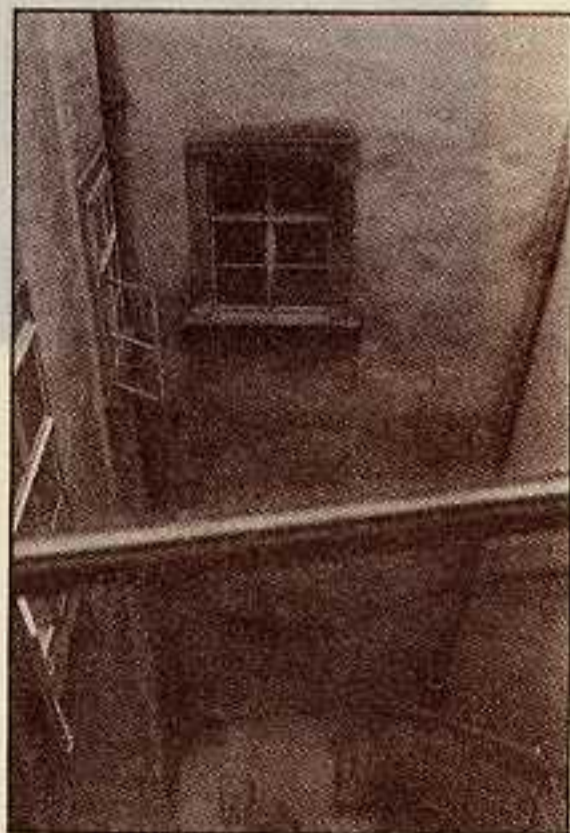
本写真集は一九七九年、ゴッドヴァレイアンリミテッドプロダクションから限定出版されたものであり、ここに掲載したのはその一部である。—編集部—

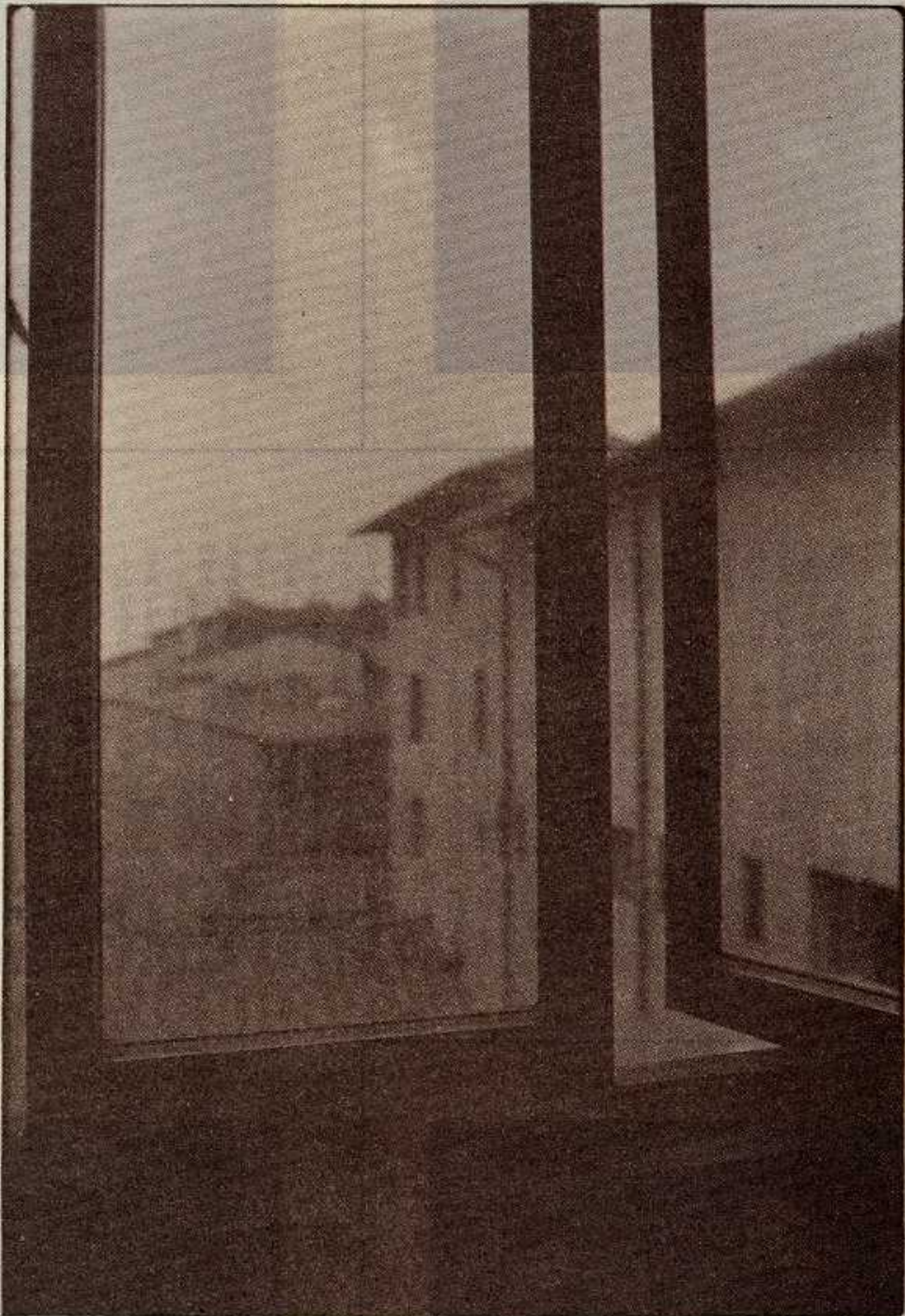


の内訳、皮体とカメラ、さらに美術師の意……という点の複雑な連なりが無限の入れ子構造として構成される時、どのような事件が起るのだろうか。マンティアルグは、視線が壁面を貫くためには内側にいなければならない」という具合にグイヤモンドの光学現象を説明している。壁とは言うまでもなく作品行為である。では、作家は「これの視線をカメラの中に、連なる点のそれぞれに射しなければならぬのだろうか」。

この作品集のタイトルを直載に表現するような映画博物館の素敵な横川の標子窓から覗く深い樹木、オーストリアギャラリーの薄紗のカーテンを透して見える公園、ウフィツィ美術館の定枠を強調した外景などはそのような内部から見た外部であり、窓が光を味方に行っているために、外部から内部を窺うことができない。ここでは視線の逆行現象は起らず、あくまでも水平に外に広がる同心円の波紋として存在している。では、アルヘルティナの建物内部の屈折した階段、向こうの窓、一階の扉とコンクリートの床などを収めた作品はどうなのだろうか。まるで自分の背髄を覗いたかのように、あるいは神経線維を映し出しているかのように思えないだろうか。ヴェネチア歴史美術館の作品では、最近くの見事なレリーフを中心にして聖者の左手と像の全体の影が、脳髓の裂に現れる光と闇との危うい、暗示的な関係として見てとることが出来る。これらは、視線が視線を逆行し、肉体の内部に向かうために起る、いわば入れ子構造の垂直の波動と考えられないだろうか。

そのような意味で、バイエルン博物館のアダムとイヴの彫刻を素材にした作品は周到である。ここではショーケースに映る作家の背後の窓を通した外景と、その窓に映る彫刻を、ショーケースの扉と後ろの硝子に映すという演出者の精密な計算によって、まるで合せ鏡から語りかけてくる悪魔の誘惑の声のように、異様な世界を垣間見させている。このような入れ子構造の波動し、躍動し、それゆえに一層複雑な運動は、まさしく物質の創造の舞台であり、思想と技術との一致という古代からの夢を造型し、濃密な時間を充電しようという、凄じい意志の形である。物質はこのように時間を注がれ、グイヤモンドが内部から発光するような至福の状態に至り、燦然として生命を帯び、自ら思考し、自ら舞台を疾り抜ける。その意味で、あのマンティアルグの暗感を抱きながら、この作品集では森羅的なスペクタクルが展開されているのだ。ヨーロッパの老練寸前の文化を単なる背景にし、神谷俊美自身をも演出家として遠景に留めさせることによって辛じて成り立つ、カメラの中に渾然と溶け入り、その頭脳と化した視線が唯一の主人公となった物質創造の巨大なドラマが、私たちの作品を見るといふ構造をも擾乱しようとしているのである。





On the right side of the page, there is a vertical column of text in Chinese characters. The text is arranged in a single column and appears to be a caption or a short description related to the photograph. The characters are small and difficult to read precisely, but they are clearly legible as a block of text.



幽霊は出てくるといふことではな
 さま、村を廻り出ることではな
 了肉村の悪霊は夫は其の血、いまだ、
 心、半貫半割の井屋をひき、
 肉村の悪霊は夫は其の血、いまだ、
 肉村の悪霊は夫は其の血、いまだ、
 幽霊は出てくるといふことではな

幽霊の書

エリニヤスの書



天狗の書
 天狗の書
 天狗の書
 天狗の書

天狗の書

空中の書

空中の書

紙田 彰

紙田 彰

林檎の研究をしている友人に次のような話を聞いた

虫が湧くときに森の番人が注意しなければならぬのは、虫の口から漏らされる液体を中和することではなく、果実の中に棲む生命の素が暴れださぬように手を打つことである、と

酔顔の微笑

眼の泉に点々と注がれるものが純水であるとするならば、おまえたちの滂沱はいまや軽快なる天使の貌。

眼の泉に滾々と湧き出るものみな純水と呼びうるならば、おまえたちの滂沱はさながらに軽快な天使の貌。

てのひらの道は過去に通じ、未来の建物を影の細部まで映している。おまえの名こそ人知れず朽糜の光栄をもたらすものなれど、ここは酔顔の微笑が愛撫のとき。

エリニユスの裔

眷属の声

幽霊を見ていた。

肉体と魂の分離の術を試みていたとき。

病人用の質素な寝台の白い敷布の上で、細い体を人形のように静かに伸ばし、心臓の上で指を組む。半覚半睡の状態をめざし、夢を見るようなつもりで、ただ意志だけを鞏固にしている。やがて肉体の感覚が失われてゆく。いまだ、少年は考える。

いま、体を脱け出ることができると。

幽霊が訪うたのはこのときだった。



実験室のドアが、鍵のかかっているにもかかわらず、音もなく開き、すでにドアの前に、白っぽい、やや薄汚れた長い布を纏った男が目を爛々と光らせ、漂うごとくに佇んでいた。おれの胤、おれの分身、一族の者よ、幽霊は語った。いや、語ったわけではない。そのような思念を、心と心を結ぶ対話の術で、少年に言葉を告げたのである。

おれは十年前に悪逆無道の罪人として、死を与えられた。爾来、悪逆の念としてこの世を呪い続けていた。おれは特別な悪人だ。だが、どうしようもない血を持った男だ。おまえの母親は自ら進んで、このおれに抱かれたのだ。

少年は忌わしい緊張感などというものに囚われぬ自分に驚愕していた。幽霊の語る言葉がよく呑み込めぬままに、ほんやりと寛いでいた。なつかしい匂いを嗅ぐような気もした。

覚悟の一服

海辺に着いたときには、すでに夕陽も翳り、雲気が水平線の向うから頭上の空にまで押し寄せてきていた。

灰色の砂浜がいつそう濃い翳りと、海からの湿った風を受け、黒々とした影に変じてゆく。

少年の担いできた新品のテントは、夕闇の中に眩しいくらい明るい黄色だった。

老人は何も言わずに荷を解くと、砂の上にはばらばらに投げ出したまま煙草に火を点けた。ひとくち、重そうな息をついて、その煙草を少年の目の前に差し出した。

溺死に似せて

水の冷たさと殺意の衝動がびったりと重なってくる。針のような鋭さだと少年は考える。華奢な腕のどこにそんな力が潜められているのかという常套句。老人の光を失った瞳の奥に、運命の受

容とかに似た優しさのような表情が掠める。それだけだ。ものの数分間の暗闇。赤黒い月は沖合にかかったまま、その数分間を凝視している。観客はその月を通して光景を楽しんでいるのであろう。充血した眼と白蠟のような顔。水の色にも似た死の訪れ。

静謐のひととき

静かな睡り、ときとして凍るような夢。幼年期の薄墨色の景色から、渦巻の形をして浮かび上がる極彩色の洪水。耳鳴りを伴って訪れる体表の微妙な顫動、輪転機に附随する独特の匂い。蜜柑の涸いた皮、ソーセージの包装紙。夜が好きというのでもなく、嫌いというのでもなく。眼の芯にあたる空洞に棲む者たち、栓をした頭脳など……平癒の向かぬ病土の空に響く。銃口がこちらを向いている、空間には紫の翳が流れる。声を出してはいけない、頭の禿げたフランス人が囁く。燈を点してもいけないのだらう。革表紙の書物の位置がずれている。ときおり数本の蠟燭が濡れたように光っている。罰を、鞭を、割れたビール壘を。数秒ののちに静けさの極限を迎える、喉から弱い息が洩れるだけに……

人類の鉦脈

最初に出会ったのは優しい眼をした狂女であった。眷属の一人であるから雰囲気は思い浮かぶのだが、明瞭な顔の輪郭は記憶の底に沈んでいる。雪が降っていたのかも知れぬが、降っていないか。たかかも知れない。まだ晩秋の頃であったかも知れない。田圃の傍の清らかなせせらぎで洗い物

をしている後ろ姿も、和服であつたようにも思えるが、判然としない。振り返った女と言葉を交しているのだが、何を喋つたのか、たぶん挨拶をしたのだろうが、その貌ともども思い出すことはできない。もしかすると、彼女に関する思い出とは、後年になって一族の不可思議な秘匿の匂いと証言によって組み立てられたにすぎないものなのかも知れない。

だが、たしかに最初に会つたのは彼女のはずである。逆算すると、二十三、四歳、それ以降は知らない。

人類の鉱脈

烟草のあるところにライターがあると決めてかかつて、書物の蔭の烟草の箱に手を伸ばすとライターの影も形もない。つまりこういうことだ。たしかに烟草と一緒にライターを置いたのだが、それは新聞の蔭であつてこちらではない。烟草は二つあつたのである。なにやら嫌な気がして頭を軽く左右に振っていると、耳の奥で澄明な鈴の音がした。耳朶はやわらかくて気持のいいものだが、あの洞窟はいくぶん気色が悪い。ひとりで侵入してみたが、誰もいないので閉口した。たしか帆柱をあげて素晴らしい勢いで航海したのだが、いまや寸秒。そうこうするうち燦然とした都市に着いていた。このときは鈴の音が高樓のてっぺんに突き出た尖塔に発していると知っている。

砌の下に T・S氏に

石仏の首が

際限なく転ってゆく

賽の目を数えずとも

露地裏には秘密の部屋があり

男の肩にはヒ首が刺さっている

硝子の汗を噴いて

心臓は鉄の音に高鳴る

だらだら坂は小糠雨に光り

銀の靨を縫い込んだ靴の中に

スウェーデンホルグの著作が一冊

ガス燈が闇を円形に照す

決死の闘いとは

気障な溜息

鎖骨二本が急所である

額に五寸釘が打たれると

夜々の濛気が氷解する

水晶の坏に

経血は釣り合ぬ

龍騎兵を奪うには

腕力が肝要だ

...

球形の棺に

百科事典が葬られると

不気味な鳥類は

アポロンの箭で串刺し

浮揚する机上に

頭脳のモデルと

博奕打の胆

精囊に

針と文字盤が蔵われる

女の睫に血が滲む

愛撫されても睨らない

名を呼ぶと

砌の下に沁み込んでゆく

誰もいない公園の向うに

朽た卒塔婆を見る

境内でけたたましく喋る

絵馬の中の神々

石燈籠に残された

黒髪の一束

物怪が御辞儀する

滴

時計の針を

神話の錘りとする

いまや聖霊たちの夜宴

星は

都市の遺構にまで

悪意の粉片を積もらせる

寸秒の女神が

悖徳の詩人と交接する

左手には習慣性のある怒り

右手には焚書に供するノオト

筒先には禍いの唇

そのような人体は

いかなる存在とも同じか

いかなる未来とも交わらずに

永遠の滴として

尖った針に姦される

人形たち

人形が数体

稽古用のバス・ドラムの腹に

沙の涸いた喉笛に

詩人の義眼の中に

玉葱の海に浮かんで

火傷のために

鋭い声をあげている

土の底に月ごとの滴を注ぐため

遙かな青空に喋まれた言葉を与えるため

時という虫に啖わせるために

折れ曲がった手足

むしられて逆立つ金髪

抉られた眸の奥のぜんまい

ぬりたくられた狂えるもの

彼女たちはよみがえる

きまって深更

一瞬の夜宴

ありとある家々で
あふれる空気の中で
世界を腐敗させる
峻烈な意志

海に浮かぶ館の

とある部屋の片隅に
かくのごときを誌す書物がある
つまり

海の歴史しか持たぬ
あらゆる家々の――

岸辺

忘却のアシは
切岸から突き出ている
聖なる声をまねて
亡霊の名を呼ぶ
十数億年の生涯を
一箇の砂粒に封じ

齡老いた光
遺されたルーン文字

フネが迂る

月光と影のささやき

青い裸身よ

風にふれる乳房

するどい腰

尻の盪惑的な曲線

ふかい溪間よ

母なる物質の彼方

ふたたび想い出せぬ

その名

処女の血のこわれる

ふるいふるい戦い

娘らの命で織り上げた布が

若者の蒼い髪を束ねていた

黄金の死の顔に

すでに名前はない

（……へその緒）

亡霊のかたちは東はアフリカ
泡の自在な殻に吞まれ
十億の浜辺に舞い
百億の水底に沈む

夢が波のように遍在している
光はより大きな光のために
振り曲げられ
永遠の渦を巻く

光のうちにあるものは幸いなるかな
光は無限に直なる神
光の外にあるものは不吉なるかな
光はあくまでとどこおるもの

わが砂のゆくえ

夢にあらわれ

鏡のごとく流れゆく――

時はまばたき

夢の胞子にあるべきなり
おお クリスタロイド
最初の名のはじまり

忘却のアシは

一瞬の距離しか知らない
それは一瞬の跳躍

流れゆくものなべて
永劫の遮断である

誘惑

(1)
そもそもベルの鳴り方からして妙だった。低い微かな音でありながら、目覚時計のように鋭く細い連続音なのである。
大きな油虫が素晴らしい速度で、濃緑の絨緞の対角線上を疾ってゆく。六畳の居室は机の上のライトを点けたきりなので薄暗く、エナメルのような硬い光を燦かせた虫が闇の中に残像を見せたまま吸われてゆくと、もう見つけることはできない。
背筋に冷えた空気が貼りつくような気味悪さを覚えながら、幾度かの呼出音の後、受話器を取り上げてみた。
優雅なアルトが、夜更の電話の非礼を丁重に詫びながら、ある集まりに招待する旨即刻来場を乞

うと告げた。

奇妙な性癖を持つ友人の名が二、三挙げられていたようだが、ほんやりと油虫の消えた辺りに眼を凝らしながら不吉な予感に捉われていた。心配することはない、決して怪しい集まりではないと、電話の主が言っているかのような錯覚も覚えたが、不吉な想いは癒えなかった。というより、なおも昂進したのである。

女の声が魂を揺する性質のものであったことも一因なのだが、なによりも電話という器械を介したはずの声が器械の匂いをいささかも感じさせぬばかりか、頭脳を麻痺させてしまうような、地の底かなにやらの別世界から唐突に躍り込んできたかのような気配を漲らせていたからである。

その蠱惑的な声に酔いながら、集まりの場所が伝えられるまで、女の喋るにまかせていた。饒舌というよりも、軟質の声音で滑るようにゆっくりと語られていた。最後に目的地の住居表示が告げられる頃には、すっかりその女の声の魔力に犯されていた。行先の場所が所蔵の地図に載っていないのはすぐわかったが、なになんとか行けるだろうと考え、その招きに丁重に礼を返し、応ずることを付け加えると、体を羽毛で愛撫されるかのような妙に艶かしい笑い声を耳に残したまま電話は切れた。驚いたことに、最後の一言を除くと、電話の廻路を独占していたのは女の声ばかりであった。

魂に得体の知れないものが注がれたように、長い余韻が闇の中に滞っていた。

妄想宣言

我らの時代はあまりに遠くへ押しやられてしまっている。

我らの時代は永遠に來ぬのではないかと、直立的な諦観から始めるべきではないのか。

時代そのものを断ち切ったときこそ我らは我らの愛するものの側についたといふべきではないのか。

それはある種の狂気の産物、妄想の全体に相渉ることになるのではないのか。

我らは百年と千年の計をもつて、つまりは歴史の時間と肉体を完膚なきまでに我らと切り離れた場所から我らの結託すべき詩

という全体に結びつくべきではないのか。

もうすべてを無視してもかまわないのか。

もともと我らは我らの方法においてしか、詩を、文化を愛することのできぬ場所にいたのである。

我らが書くことの現実は、それこそ現実と呼ぶことを拒絶する高みと、おおそれこそ妄想の高みにしか存在せぬものであろう。

軟弱な土壌は壊滅するであろう。

世界は軟弱な土壌そのものである。

我らの現実はそれこそあまりに空想的な、世のすべてから忌み嫌われる際限のない空虚にある。

君らとは無関係であると言いつて、我らは我らの唯一なしうる仕事に精を出せばよい。

よしや、それが数億年の先であろうと、我らは尻を割らぬ覚悟だけで、死は死ぬことだけであるような、純粹な妄想の宇宙に

飛び出してゆけばよい。

我らは絶対零度と絶対の燃焼を唯一可能にできるものである。

文化というものは何をなしているかということではない。

人は死に、人は生れ、星の屑にも満たないただの瓦礫にすぎない。

また文化とはいわゆる存在証明でもない。

ただ、あることの覚悟にすぎない。

それは証明もされない、それは何ものかの完成でもない、それは己れを極限に合わせることである。

それが何ものであるとすれば、どれだけの極限を見やっているか、そのことによってその不合理を相手にどれだけ喧嘩がで

きるかにかかるといふ、己れだけの問題であらう。

すでに世界はない。

すでに時代はない。

すでに永遠に未來は、よくいわれるような形ではありえない。

我らは宣言すべきか。

無縁でないものこそ存在しない、と。

我らは、書くという、何ものとも無縁で、無意味で、無価値で、ただかくあらざるしかありえぬという方法性だけで己れを律

するといふ、覚悟だけをもつものである、と。

緑字生ズ

29

りりりり四季
愛が愛であるから
(未来の菌茎を破って)

花のみの奇怪ふる
抗生物質が
moraleを破壊したか

崩壊辞典とべにしようが
猫の死骸が吊られている
肥料にもならぬから

小便をする
鏡よ 虹よ
狂おしくあやしかるべき

死は凍る
銀色の粉は

光のかけらなんだわ
そのとき少女は孕んでいた

31

雨上りの夜
ハヴァナの吸口を噛み切る
烟の中に

童女の顔が浮かぶ
その幻を環にして吐くと
時間の翳が

みどりになる

32

老いた額と古い都市
ウィーナス

時の外側を歩く者たち
少年の息をとめる者

33

歩いているときに、なにげなく後ろを振り向いた
ことがおありでしょうか。そう、いま感じている

のはそのことなのです。つまり、影のような、なにやら得体の知れないものにつきまとわれているような気がして振り返ると、暗黒の底の方から、冷たいまなざしが、肉体はもとより、心の深奥まで貫いてくるような。危惧とか恐れなどは違つて、周囲のあらゆるものが憎悪している、いや、自分の存在自体が己れを憎んでいるというような死というちっぽけな現象よりも大きな苦惱。そのままずっと歩いていくと、自分の発音が、いわば十三階段への招きに思われ、それで後ろを見てしまったのです。自分でも何もないように思いましたが、そこにはもう、ありとある憎しみが大きな渦をなして、こちらを睨んでいるのです。けれども死を与えようなどとはせず、こちらにしても死を選択する自由すら奪われているような気がして、彼らはそのような存在を徹底的に嘲笑し、恥辱にまみれさすのです。気にすることはないよ、ただの分裂傾向だといわれるかもしれませんが、断じてそんなまやかししいものではありません。断じてところで、崖から突き落とされた夢をご覧になったことはおありでしょうか。

あなたの隣に腰かけて
水仙は革命家である
草笛を指の間で鳴らすと
信号が送られてきた
いつか敵に出会ったら
そのときこそ
一緒に死のうと
あなたは
いついつに
秘密に連絡すると告げる

この永続的非和解
強姦へちまめ

35
アルテイスへとやって来た
心あたたまる辛さ
やりばのない眼

瞼の裏
瞳孔の底

膝の関節が外れる
殴られたときに挫いたのだ

ばさりと残飯入れに捨てる
時間が詰まっていたので
痛がって声を出すこともない

36
門の傍らで

聖マリア像が砕けている
生と死で区別できないから
呪われている
キツタリア・ダーウニイという茸を拾い
森をさまよったあげく
肉体を地に捧げた

37

へ鬼の目おちて
冥土の唄にひえびえと
ああア お腹の首の声
へ鬼の目ななつ
星珠ころげひえびえと
お腹の お腹の 首の声
雪花菜！
死滅したきれいな肉

38

ルーキーナよ、聞け
宇宙の裂目から
巨大な蛆虫が湧き
ドン・キホーテが凱旋した

息状を示せ

はじめははじめられたときから
ぬかるんでいたと
つまり腐敗である

ために

夕陽はバラの花に包まれ
世紀の眠りに就く

ために

五体に沁みる

死のリズム

39

熔接工の家を訪ねると
小さな暖炉に
ヴァシリキ式の陶器
燃える水晶時計

雪という字のある娘が死んだので
雪という字のある盲が死んだので
雪という字のある記憶が死んだので

煤けた顔を拭うと

その男は呟いた

たぶん偏執狂であろう

いたわしい別離であつたらう

40

己れの造物主が己れだと知った人形が
いささかくたびれはて
死体のふりして
不可知論を唱えた

アグライアー

つねに架空の少女だったことを

玩具は嗤う

つねと変わらぬ

機械仕掛で

41

朝を抱きしめるように
冷えたビールを呑んだ
それからいとまごいをし
ほとほりのさめぬ夢を思い
沼地を歩いた

ホオジロの屍体

こわれる風景

あるかなきかの暗い捷径

神経が疲れている

薄笑いを泛べ

うたたねでできる場所を捜した

朝は家々をつらぬいて

もう睡りこんでいる

心臓が冷たい

意志もまた冷たい

42

夕陽が溪間にとどまっている
呆れガラスのはばたき
時忘れのなめくじ

樹々の間に生まれた迷路

宇宙を褐色の壺につめこみ

化石の刻を密封する

現代文明のアツテカである

くりなされた空

(闇の空模様)

猛禽類が翔ける

その飛跡が尖っている

鋭い暗闇の

エーテルの流れのようでもある

彼らは翼で虹を蔽い

ものみの塔をつついた

44

弦のような肋骨

ブナの木蔭で

死体の手の甲が重ねられる

下草に埋れて爪が光っていた

テキシーランド・ジャズがほろ苦い

邑人よ 耳をそばだてよ

45

frogよ 跳躍よ

つなかりにたたみかけ

まらが抜けたり刺さったり

きちがい薔薇の咲く丘で

あいみたがいの知らんぷり

おまえがclitorisistだから

無限にさいなまれる

ミスアオイよ

安堵して振り返るな

野の花が濡れる

白骨がしぶきを浴びる

道の向こうから来る破戒僧の

犬歯が自然に反している

46

ずいぶん深い思考に浸っていたときに、急に目の

前がほんやりして視点が定まらなくなった。椅子

から立ち上がると、気分を落ち着かせるためにラ

ム酒を啜った。空間が歪むように、思考の中に何

か空洞でもできたのだろうか。アルコールが徐々

に全身を廻り、指先の神経まで麻痺が達した。精神と肉体がとても楽になっていた。自分自身がどこか別の次元を移動しているかのように爽快だった。しかし、本当はとんでもない悲惨さの中にいた。振り返ると、漆塗りの置時計の黒い振子が斜めに傾いだまま、こそとも動かないのである。

時計の文字盤を蔽うガラスに、少年は異様なものを見た。そこにあるものは、目の両端が吊り上がり、顎が醜く歪み、黒々とした肌は錆びついていた。立ったままの姿勢を永遠に保たせるため、全身の骨格が硬い鋼鉄に変質しているに違いなかった。少年の思考は鈍い軋り音をあげるばかりで、声を出すことも、身ぶりで何かを示すこともできない。ところで少年は、病室の中で狂人は何を考えるのだろうか。つねづね考えていた。そう思いながら病人を訪ね歩くのが少年の日課だった。その日も、その日課を果たそうとしていた。けれども、このとき、少年はつねとは違った少年になっていた。狂った人が何を考えているのか知りたくてたまらない。少年は約束の時間を気にした。鍵は誰も開けてくれない。時計は永遠に停まっている。

歴史が破壊されつくすならば
なんとという痛快

時を告げる鳥を捜すには
永遠の道草を喰わねばならぬとは
ああ！
頭脳崩壊
あつかんべえ

47
火の時間の火
手のつけられぬ立体

48
やはり女は開かれていた
なぜなら 黝んだ乳首が冷たい
ゆで卵を剥きながら
オオカミが啼く

ふしつげな微笑と
きどった挨拶
胸の双つのふくらみに
黒百合の花を与えよう
Rheumatismusの脚と
夜の声が冷たい

感覚を裂いて
夢をなせ
栄光を鳴らす
骨よ

タロットの背後に
スパイがいる
おとなしそうな顔つきだが
何を考えているかわからない
一枚一枚めぐりながら
占おうか ぼくの語の齋

49
ヤマトネコ

光はアルコールの匂いを放つ
言葉つきの怪音波
詩が書けないので
妄想を焚く
爪の伸びた
皺だらけの手

50
海面に迂り落ちるもの

時へ向かう時の皮質
また人骨が出てきた

突堤を駈ける小犬
冬の海が流れている
夜は死に近づいているようでもある

岸壁で碎ける波
愛するふりして肩を抱く
肌がざらざらしていた
涙がにじんできた
沈没した船の上を
ウミネコが飛ぶ

船を待つ旅人
ブランデー漬けの桜桃を
ひとつぶつまんで
彼は酔う

歩痛という言葉
虫歯で死んだ女の
両足に巣くった虫歯の足よ

51
僧院でコーヒーを淹れる

特別な日

ドイツの農村では

花々が枯れる

ホフマンという男が
聖母像を抱いていた

そのかたわらで

太った尼僧が

青い脚を伸ばした

52

死装束の姉をかき抱く少年

銃と毒

筋肉のわななき

彼らは追放されていたのだ

狼たち

月の輪熊

鉛と砒素

53

ひとりひとよのふかなさけ
ふたりふたなりうしろがみ
さんになさんずのかわわたし
よにんよるべもぬしもなく
ごにんごくもんぶらさがる

見よ！ 権力のなわきれ

54

眇の売笑婦に地図をさしだした

市場の隅に

夜の脂がたまっている

彼は旅に出ている

出立したその朝には

ここまでの道が消えていた

雨が上がると

色の足りない虹がかかる

そのとき眇の女は

変ね 夜だのに

と呟く

祭壇は白い骨で組まれている
乳呑児に舌はない
天蓋には男根がぶら下がる

瘦せたりヤマが

夜の街をとほと歩いている

リヤマの背の

眇の女の

あてどなく疾走しようという夢

火焙りだ

火焙りだ

人々は喚きたてた

羊皮紙に刻まれた

地図をしまい

地球は停止していると思う

雨が降りはじめ

眇の売笑婦が背を向ける

その白い影に別れを告げる

寂れたせせらぎがある

ロートレアモンのことを考えながら

しばらく歩いてゆくと

湯の匂いがしはじめ

山並の向こうに

雲が涌き出していた

どこから来たのか

鉄屑を籠に背負った男と擦れ違う

男は挨拶のかわりに

古い神の名を言った

目の前に

湯煙が立っている

紅梅の小枝を持った

肌の白い女が

裸に見える

そういえば

泣き顔にも思われる

雑沓で見失った

恋人の面影に似ている

蚕は眠っているか

そんな言葉が口をついた

死刑執行官が、手袋を――

山間の自然道のわきに
朽ちかけた雑木林と

緑字生ズ

創刊号はまたたくうちに消えてしまった。発行部数自体が僅かなのだから当然のこととはいえ、それでも手元から失われていくのは物悲しい気がする。これは何に対する執着なのだろう。生まれ落つ以上はそのものの勝手なりということはわきまえてあるつもりであつても、散佚を畏るべしとの思いも絶ちがたく、時をずらしながら読者のお目につけようとしたのだが、雑誌とは所詮、一瞬の時に啖わるるものなのか。

識語

書店に置くほどの余裕も気持ちもなかったのだが、少しく部数を増やして、いささか流通させてみることにした。これも読者の強い支持に励まされたもので、改めて御礼を申す次第。創刊号とところで、本造りというのには妙なもので、充足することなどこれっぽちもない。それを技芸の魔とでもいうのか、面白みでもあり辛さでもある。本号では少々体裁などを変えてみたが、あと一、二号もすればこの形は熟すであろう。けれども、頭の中ではもうすでに、小誌のスタイルが落ち着き次第、まったき別箇の造本に着手しようとして決めている。中身だつてどうなるか分からない。こちらの方面でも諸賢の協力を仰ぎ奉る。

直江屋主人

次号製作の資に充てるため、左の二点をご希望の方にお頒けいたします。ご協力ください。在庫僅少のため、申込順に発送いたします。

*「地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中枢に大洪水を齎すであろうか(略称フネ)」創刊号/魔刊号全三号揃(昭和五十年九月)昭和五十一年四月刊、頒価各五百円) 執筆者 天沢退二郎/入沢康夫/金石稔/山口哲夫/帷子耀/青木はるみ/他 今回頒価 三号揃 千五百円



*紙田彰第一詩集「浣腸遊び」 Enemy Game, (昭和四十九年十月刊、定価千三百円)



緑字生ズ 第二号*昭和五十八年十二月三十一日発行*定価 千五百円*編集発行人 紙田彰*発行所 東京都江戸川区西葛西五、八、七、九〇六 直江屋*振替 東京一、四〇一五七*電話 〇三(六八六)五九一五*印刷所 共信印刷

今回頒価 千三百円 (二点とも、送料は当方負担)

練字集

